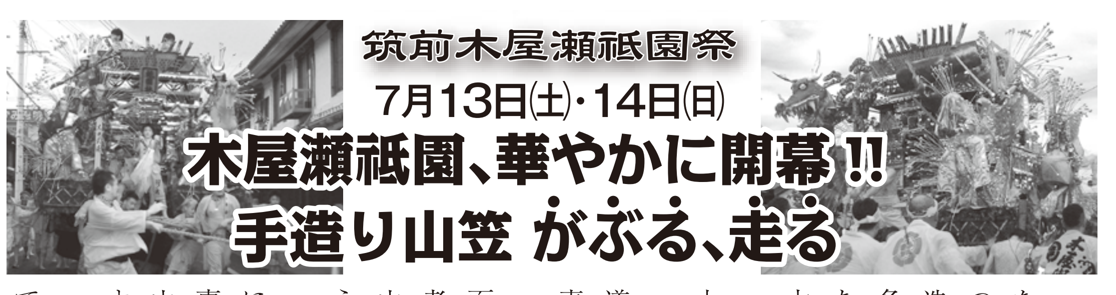
# 寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949



## 筑前木屋瀬祇園祭　7月13日(土)・14日(日)

## 木屋瀬祇園、華やかに開幕!!

## 手造り山笠 がぶる、走る

木屋瀬祇園山笠は、昨年小倉、戸畑、黒崎などの祇園山笠に伍してわっしょい百万夏まつり」に出場し、木屋瀬宿をアピールする手造り山笠が、小倉の町に華麗かつ勇壮に舞い多くの観衆をうならせました。初参加ではありましたが高い評価を受け、祭り好きの木屋瀬っ子の夢をかなえました。

木屋瀬の夏を彩る祇園祭りは今年は七月十三日、十四日の両日華やかに開催されます。

輪番制の当番町は赤山が下町、青山は中道となり、赤山の総取締役は権藤和則さん、青山の方は大津伸英さんです。

この祇園山笠の飾り人形は、須賀神社正面にある山笠会館で青年会を中心とした若者達が手造りで製作しています。この手造り山笠も今年で九年目を数え、今年はどういう人形がお目見えするか楽しみです。

祇園祭りは、七月十三日の朝、花火を合図にお汐い取りからスタートし、赤山、青山の事務所開き、そして数次に及ぶ山笠巡行、宵山笠、神社での奉納演芸、追い山、宮入りとすすめられます。

祇園祭りのクライマックスは、宮入り行事であります。赤山、青山がそれぞれ祇園町を走り、須賀神社へかけ込み、電装で飾られた人形山笠が勇壮かつ華やかに舞う様子は、観客が最も興奮し、感動する場面でしょう。

歴史と伝統のある木屋瀬祇園祭りが、今年も成功裏に終了することを祈念すると共に、町民の皆様の物心両面にわたるご協力を心からお願いするものであります。

こやのせ座広報部会長　徳永興紀

## 朝の巡回ラジオ体操　あなたも参加しませんか？

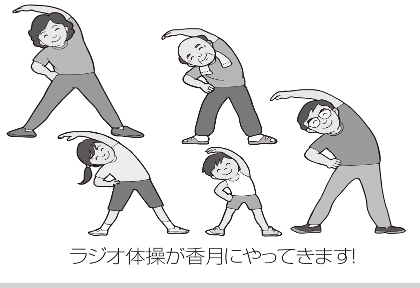
朝、すがすがしい空気の中でラジオ体操をするのは気持ちいいものです。皆さんもちょっと早起きしてやってみませんか。

さて、この夏、**NHK巡回ラジオ体操**が北九州にやってきます。それもごく近くの香月中央運動公園にです。北九州市はこの巡回ラジオ体操に市政五〇周年の冠をつけて大々的に実施しようとしています。

**実施日は八月十一日、日曜日の午前六時からです。**そもそも木屋瀬地区の「健康の会」の全員集合ラジオ体操に端を発した形で実現したこの巡回ラジオ体操は、本年度福岡県下では唯一の会場となっておりその成功が期待されています。このラジオ体操には境を接する近郊の市町村からも多くの参加があるでしょうが、会場を埋める二千余名の大半は、八幡西区南部地域の老若男女となるでしょう。

市の五〇周年記念や簡保生命の記念品などが参加者に配布されます。少し早起きして香月まで足を運んでラジオ体操やってみませんか。会場までは車で行くもよし、電車で行くもよし、また徒歩で行くもよし、自分に応じた行き方で巡回ラジオ体操に参加され楽しんで下さい。

（徳永興紀）



ラジオ体操が香月にやってきます!

## 第十三回 運営協議会総会

平成二十五年四月二十六日、こやのせ座において、「第十三回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会」が開催されました。

平成二十四年度事業報告・決算報告及び平成二十五年度事業計画・予算案が議案として審議され、すべて承認されました。

また、役員改選を行い、山田新理事長をはじめ、次の皆さんが役員に選任されました。

### 役員紹介

| | |
|---|---|
| 理事長（こやのせ座運営部会長） | 山田　靖 |
| 副理事長（郷土史料館運営部会長・まちなみ案内部会長兼務） | 松尾　良美 |
| 理事（運営事務局長） | 野口　靖彦 |
| 理事（広報部会局） | 徳永　興紀 |
| 理事 | 高宮　歳継 |
| 理事 | 松尾　洋輔 |
| 理事 | 高﨑　尚康 |
| 理事 | 船川　健太 |
| 監事 | 近藤　浩 |
| 監事 | 高野　義仁 |

### ▼新理事長挨拶

歴史的文化財が数多く残る木屋瀬宿の記念館運営協議会理事長を拝命し、身の引き締まる思いです。木屋瀬で生まれ育ち、木屋瀬が大好きな人です。皆様のご理解とご協力で、この重責を全うしてまいりたいと存じます。宜しくお願いいたします。（山田　靖）





## シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

## 第二十八回 白髪山西元寺

### 入佛慶讃法要

浄土真宗本願寺派では、平成二十四年一月十六日、京都西本願寺に於いて宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌法要が勤修されました。七百五十回忌を迎えるに当たり、親鸞聖人のご真影を安置する、国内最大級の木造建築「御影堂（ごえいどう）」を修復する平成の大事業が十年にわたり行われ平成二十一年に完成しました。

さて、平成二十五年三月二〇日、彼岸の中日に、筑前木屋瀬宿の浄土真宗本願寺派白髪山西元寺では、本堂新築に伴う「ご本尊入仏慶讃法要」が勤められました。西元寺は木屋瀬の祇園町通りにあるお寺で、寛永元年（１６２４）に、現在地に仏殿が建立された古刹で、その後幾度か立て替えが行われ、前回は文久元年（１８６９）に建築され、平成の御世の今日まで使われてきました。しかし約百四十余年を経過しましたので大変損傷も激しく、念仏道場として危険な状態になって来ました。そこで平成二十一年より、門信徒一同の発願により解体し、新しく本堂新築の大事業が始まりました。それに伴い、ご本尊の阿弥陀如来像も新しい本堂に合わせて新像されることになりました。その新しいご本尊を新本堂に迎え安置する入仏法要が勤修されたのです。新しいご本尊は、現在日本を代表する名工で、西本願寺のご本尊も手がけられた、江里康慧大仏師に依頼し約4年の歳月を経て完成しました。ご本尊は、最高品質の木曽檜の材を使った、阿弥陀如来立像です。仏像のお姿は約九十センチの大きさですが、光背をいれると百八十センチ程の大きさになります。仏像は全体にキリガネで覆われています。キリガネというのは、金箔を数枚重ねテープ状にカットして絹糸のような金糸を仏像の胴体に布の感じで巻きつける特殊工法で、そのお姿は年月が経つほど光が増し、一段と美しく気高く輝くことでしょう。仏像の胎内には、西元寺第十六世藤井大裕住職の願文が入れられました。

法要は仮本堂で、前ご本尊へのお礼と新ご本尊の出発勤行が勤められ、新ご本尊をお輿に乗せ、住職、総代、役員、関係者等で運ばれ、山門より入場し、境内を巡り、堂内で多くの門信徒に迎えられました。外陣正面で建設委員長の手で抱きかかえられ、住職へと手渡され新本堂の内陣に無事安置されました。これから幾世代にわたって、礼拝の対象となる御本尊です。慈悲の笑顔で、人々の悩みや、苦しみ、迷いを救いとってくださるような厳かな仏像です。お寺の入仏法要は、何百年に一度しか会うことの出来ない大きな仏縁です。門信徒一同の南無阿弥陀仏の念佛が堂内に響きわたる感動の中厳かに法要が勤められました。

*柔肌の白き仏や春の海*
*春の昼仏の声を聴きにけり*

（本町　野口靖彦）

## 学業の上達を道真公に願う　扇天満宮【学神祭】

扇天満宮は、御祭神として菅原道真公が祀られており、約六五〇年の歴史ある大変古い天満宮です。

木屋瀬・扇天満宮の「学神祭」は道真公が「学問の神様」として崇められてきたのにならい、毎年新一年生の男子が「うし」、女子が「うめ」の習字を奉納し、学業の上達を祈願するものです。

今年も小学校の運動会と重なりましたが、晴天の中、午後四時三〇分より神事が執り行われました。男子五名、女子五名計十名の新一年生が保護者の見守る中、揃いのハッピ姿で神妙に、元気よく神前に学業向上を誓いました。

式典終了後、子供達は記念品を手に記念写真におさまり、ご家族と一緒に楽しい時間を過ごしました。

当日は草刈り、設営など関係者の皆様のご協力により学神祭、例祭が無事終了する事が出来ました。厚く御礼申し上げます。

又、お忙しい中ご列席いただきました関係各位にも併せて御礼申し上げます。

（本町町内会長　髙野義仁）

習字を道真公に奉納します

## 新職員紹介

副館長
大村　敏明

館　長
高巣　良平

四月一日付けて館長、副館長に就任いたしました。

木屋瀬の伝統・文化の継承のため、また多くの人々に木屋瀬を知っていただけるように、記念館職員と共に精一杯努力してまいりますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

## 次回予告　第51回 企画展

次回の企画展は、**第５１回企画展「おとぎの空間展～大人気！モモマルくんの生みの親萩岩睦美が織りなす世界ー」**を平成２５年７月２０日㈯～９月８日㈰に行います。企画展関連イベントも多数予定しておりますのでぜひ足をお運び下さい！

# わたしの昔話

【柴田豊廣遺稿集】より

## 木屋瀬（七）

放浪記を発表して有名になった林芙美子は子供の頃、父と母と三人で直方大正町の馬屋と言う木賃宿に滞在し、ここから各地に行商に出ていた。林芙美子「私はよく多賀神社に遊びに行った、そして馬の銅像に祈願をこめて、いい事がありますようにと…この頃の事は、一生忘れる事ができない」林芙美子がよく遊びに行ったと言っているように、どこのお宮さんでも境内は広く、大木の影もあり老人や子供達には最も安全な遊び場であった。

木屋瀬の須賀神社の境内でも終日みんな仲良く遊んでいたし、ここにも馬の銅像があった。お詣りの人達は何かを祈願されてか、馬の頭をなでては自分の頭をなでておられた。その為に馬の頭の一部分は光っていた。遊び事にほおけていた私も、馬の銅像のそばに来た時は必ず馬の頭をなでていた。大人の真似をするのでもなく、林芙美子のように願い事なぞするでもなく、ただそうするもののように思っていて、ほのかに心が安まりふくらむようであった。

林芙美子が十三、四歳の頃の事である。「十一月の声がかかる時である、黒崎から直方への帰途父と母と私は、大声で話し合いながら軽い荷車を引いて暗い遠賀川の堤防を歩いていた」又、「直方から遠賀川を渡って一里位歩いた所の炭坑にパン等の行商をしていた、良く売れていた」と書いている。木屋瀬地区や香月地区は、林芙美子の行商の圏内であったとも考えられる。この頃の遠賀川越えは、どこの集落でも渡し船であった。木屋瀬より直方に行くには感田に渡し場があり、この渡しが一番近い道であったので利用者も多くて餅や菓子を売る人がいた程であった。林芙美子もこの渡しを利用していたと思われる。木屋瀬と植木の間も渡し船であった。この渡し場で転校されて行かれる先生を堤防から手を振り振りお別れした思い出がある。木屋瀬の人々にはお別れの場となったりお見送りの場となったり、それぞれに思い出多い渡し場であった。濯ぎもの等は殆どの人がこの川を利用していたので、川は朝から何やかやと仕事を持って集まった女達の賑やかな社交場となっていた。この川は木屋瀬大川と馴染まれている遠賀川であるが、川に沿って点在している多くの集落を守り人々の営みを助けながら、川筋文化の源流となって洋々と流れている力強い川である。林芙美子「私達三人は直方を引き上げて折尾行きの汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。堤防に沿って道が暮れ染めていて、私の眼に悲しくうつるのである。白帆が一つ川上へ上っている、なつかしい景色である。」林芙美子は毎日毎日あるいていたあの道が暮れ染めていて悲しいと言い、白い帆かけ船もなつかしいと言っている。大きい帆を上げた船が木屋瀬大川の流れを真向にして、天神浦から長崎浦「天理教会所裏」へ向かって、二漕三漕又一漕と次々に大川の流れを押し割って、ぐんぐん上るさまは雄々しくて威勢の良いものであった。川岸にも砂浜にも浅瀬にも人がいて、風任せの船乗りさんと手を振り交わしたり、大声で呼び合ったりしている良い日の良い風が心の中を吹き抜ける。宝船の絵のような船もあり、新造の煌めく船もあり、歌を乗せてすいすい上る船もあり、炊飯の煙を流して上る船もあった。流れに立ちて釣りを楽しむ人の背に、夕日が近まって来る頃は、人影もまばらとなり風も凪ぎてか、流れも止まったように静かになる。向こう岸に船が三漕はりついている、営みを終えた船乗りさんがあそこで一夜を明かすのである。とまりの船の灯し火が小さく弱くもれている、木屋瀬大川の暮れてゆくしじまである。

林芙美子「私はふるさとをもたない、旅が古里であった」果てしない放浪の暮しの中にも、一生忘れる事の出来ない心の古里となるものがあるとも言っている。私達の生活の場を取り巻いている金剛山や福智山や六ヶ岳や遠賀川は、日常見馴れていて何の変哲もないようですが、毎日毎日の暮しの中の心の糧となっているものであり、忘れられない楽しい思い出となるものではないでしょうか。朝に夕に見はるかしている山川草木のすべてに大きく感謝しましょう、やがては心の古里となるものばかりでしょうから。

「古里の訛なつかし停車場の、
　人混みの中に、そを聞きに行く」　石川啄木
「旅の人とし、ふるさとの、ことばを聞いている」　種田山頭火

古里はこんなにもなつかしいものであるから。

本町　柴田由美子

# 興味深い筑前六宿の歴史談義

## 第12回 木屋瀬芸術祭

4月29日㈷林家きく麿師匠の落語会を前夜祭と位置付けして幕を開けた、第12回の木屋瀬芸術祭、5月3日から5日にかけて行いました。

今年は、市制50年の記念すべき年で、北九州マイスターの方々によるシンポジュームにも力が入っていました。新企画のハンキングバスケット講習会は、著名な石井康子先生の指導により素敵なバスケット作りを多数の受講者の方々と楽しみました。芸術祭の中心的プログラムで昨年まで実施してきた長崎街道筑前六宿フォーラムを変更し、長崎街道筑前六宿開通四百年記念事業実行委員会の梅本静一会長が、この一年間の活動報告を行い、「川筋の街道と宿場町」のタイトルで竹川克幸（日本経済大学講師）さんによるパワーポイントを駆使した講演をし、第二部で筑前六宿の代表に登壇頂き、六宿縁の人物にスポットをあてた歴史談義を行いました。かなりマニアックな話が出て、会場の方から非常に貴重な内容なので、録音や、書記の類は、ちゃんと出来ていますか？と大変ありがたい声も頂き、有意義な会となりました。

来年の話をすると鬼が笑うといいますが、次回歴史談義はＮＨＫ大河ドラマの主人公となる、黒田官兵衛を軸に六宿に纏わるエピソードで盛り上がりたいと考えています。５日の筑前各地の盆踊り団体による郷土芸能連絡会議は、盆踊りの披露に加え持ち前ののど自慢で、例年になく盛り上がりました。ご協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。（山田　靖）





# 木屋瀬宿安政六年『年中御用留』《木屋瀬村宗旨未進判》其の一

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

資料館に入館すると、江戸時代後期の木屋瀬宿の町並みを絵馬にして、改盛町の護国院へ奉納した麻生東谷作「板絵着色木屋瀬宿図」をジオラマ（実際の風景に似せた立体模型）で設置されている。説明には、当時の戸数は二百六十戸余で人数は千六百人程と記載されていた。この「年中御用留」には、男八百十九人で女は八百三十五人と、「宗旨改帳」を作成して村庄屋が、大庄屋加藤太右衛門の奥書を経て遠賀・鞍手郡役所に届出している。宗旨改めとは、宗門改めの事であり福岡藩では、踏絵（聖母マリア像・キリスト十字架像の銅板・真鍮板）は行われていない。

幕府は、寛永十三年（一六三七）の島原の乱後はキリスト教の信仰を禁止し、宗旨改めによってキリシタンを厳しく取り締まった。藩では、春秋二回（三月と八月）庄屋や組頭達が二月の初め頃迄に、村の各寺より宗旨寺證拠を取り揃える。つまり、村人の檀那寺が一人ひとりについて檀家である事を証明した文書である。庄屋が集計したものが「宗旨人高目録」であって、庄屋は各寺ごとに檀家の名前、年令、続柄（子女・養子・甥姪等の血縁や家族関係を表す言葉）地縁関係を表わす組合（五人組で組頭の名を取って何兵衛組合）と「名子」と云う身分的な従属関係（主家に仕え労役を提供する）等々を記す。

## 「宗旨改帳」と「未進判帳」、その中に記してあるのは

庄屋は以上の宗旨改帳を清書をして各檀那寺に届けて、各檀那寺の奥判（住職の署名）を取る。

三月に入って、村人は或る指定された場所で、庄屋の前に出て宗旨改めの血判を取られる。神前で偽りのない事を誓うという意味の血判の紙（起請文の料紙）を用いた。この血判を誓紙判形と呼び、十一才以上の男女は全員、左の中指の爪」の下に釘を刺して行ったという。十才以下は血判が免除された。病気や旅で宗旨改めに出てこれない場合は、此の表題に記述されている「未進判帳」に家族の者より聞き質した文言を項目毎に記帳し、その後は庄屋の責任で、必ず後日に宗旨改めが行われたそうだ。その未進判に、項目に従って記されているが、言葉の未進とは、もともと納めるべき年貢米が完納できていないと云う意味で、宗旨未進も何等かの事情で宗旨改めに出頭しなかった者というわけである。

〝木屋瀬村宗旨未進判之者　御国中御触流御願申上ル事〟の依頼の文言の次に、性別、名、続柄、出立年月、人相、着用衣類等が箇条書に記述されているので、何人かの未進者を抜書にしたい。

一　男壱人　歳六十　大造名子
惣五郎　右者　嘉永元年申六月
依村方立出申候　人相　中勢
面体　丸き方　色黒き方　目鼻
普通　着用衣類　浅黄縞単衣
黒色帯

一　男壱人　歳三十二　又作甥
孫平　右者　同年申六月依村
方立出申候　人相　勢高く　目
鼻　鼻稍々低い　色白き　着用
衣類　紺色縞袷　藍色締込帯

一　女壱人　歳三十六　右平女
房　右者安政五年午七月依村方
立出申候　人相　勢低き方
面体　丸く　色幾分黒く　鼻高
く　着用衣類　薄浅葱色単衣
紺半幅帯

このような未進者が二十人（男十二人女八人）安政六年未八月に書き連ねてある。各人の木屋瀬宿の出立年代を調べると、十一年前の嘉永元年から三年前の安政三年にかけて出立した者が十五人も、毎年の未進判帳に書き綴られているという事は、如何なる理由にしても正しく出奔（行方不明）といえよう。

また、未進者の続柄で血縁でなく、現代では聞き慣れない「名子」という言葉について若干説明しておきたい。中世や近世の封建社会には、血縁でない他人が何等かの理由で労役を提供して主家に仕えていた人達の主従関係を表す言葉である。労役を必要とする農家や商家に多く、一般の人より地位は低くみられていたようだ。

こうした未進判帳に記帳された人々は、郷里の木屋瀬宿を後にして旅に出かけた儘に、殆んど音信が途絶えていたであろうが、何処かで生活の糧を得ていた事は事実である。

庄屋より未進判帳を受けた郡役所は、どのような手だてを行ったかを次回の「寄せ太鼓」で古文書等から触れてみたい。

**ご来場ありがとうございました！**　第５０回企画展「市制５０周年記念事業５０年ものコレクション～北九州市のあゆみとともに～」（平成２５年４月２７日㈯～６月９日㈰）は、北九州市制５０周年を記念して北九州市誕生の歴史や現代までの活動などがわかる当時の風景写真や、５０年前に使用されていた生活用具などを展示致しました。また、五市合併の功労者である岩尾四十三郎氏の作品なども来館者の皆様にご紹介させていただきました。９０３名とたくさんの方に来館していただきました。誠にありがとうございました。